

鈴木丹士郎教授を送る辞

山口 政幸

鈴木丹士郎先生は、文学部が創設される一年前の、昭和四十年より本学に勤められた。

はじめは、商学部専任講師として所属しておられた。経済学部、法学部よりはじまった本学は、経営学部、商学部と漸次学部を増設していったが、文学部という新しい学部の出現は、実学を重んずる気風の強い我が校において、一つのエポックを築いたと考えられるし、それは今なお続いているものと思われる。そうした新しい学部のスタートの時点で、鈴木先生は気鋭の国語学者として、自らの研究生活を開始された。三十才の時のことである。

爾来四十年の歳月が過ぎようとしている。四十年という年月は、一人の人間が学び、育ち、自立していく年数として十分すぎるとも言えるし、また真の伝統を培うためにはまだまだ不十分な期間とも言えよう。我々が鈴木先生というかけがえのない存在を失うときはそういった時期でもあり、また実り上がった文学部という豊麗な果実がまた異なつた枝木にのびていかねばならない、文字どおり節目を迎えつつあるときであることも忘れてはならない。学問や研究は時代に応じて変化していかなければならないのは言うまでもないが、七十才という現代の感覚からすれば決して高齢とは考えられないような年齢の、しかも先生のごとくいつまでも瑞々しい学問への情熱を失うことのない先達とお別れしなければならぬのは、大いなる嘆きと解するほかないであろう。

先生の学問領域については、遺憾ながら浅学の身にとつては、十分にお伝えすることができない。ただ一つだけ確かなことは、先生の国語学のご研究が、常に肥沃な日本文学の土壌と相見えるようにして行われてきたということだ

ある。国語学という学問領域において、鈴木先生のお話やご研究が絶えず人懐かしい印象を、専門性の無い身の上の者にとつても強く感じさせられたのは、先生がお持ちになっている文学という精華に対する厚い信頼に基づいているものと考えられるのである。それは却つて、文学を教える身にとつて、強い光源ともなったのである。思えばそれは文学と国語学の幸福なときであったのかもしれない。さきにお辞めになった明治文学をおもに研究しておられた近代文学専攻の畑有三先生と、鈴木先生がよくご一緒に本当に愉快そうな談笑を交されていたのをいま思い出されずにはいられないのである。同世代であることもさることながら、それは、信じるものを共有する姿でもあったのだろう。

ご経歴を見ればわかるとおり、鈴木先生は多くの大学、大学院で非常勤講師を勤められている。それは都内の私立、国立の各大学をはじめ、母校である新潟大学や東北大学など地理的にも広範囲に及んでいる。また、佐藤喜代治編『国語学要説』から始まったご著書のうち、辞書や事典の編纂、執筆のお仕事も、古語から文法、また『大辞泉』のようなものまでと実に多岐にわたっている。その中に、『日本文学名作事典』や『雨月物語』などの文芸作品の事典項目や索引が散見できることなど、先ほど述べた鈴木先生の文学への思いが結果されたものではないかと拝察される。実に数多い国語学の専門のお仕事の中に、『雨月物語』のほかに、『馬琴の語彙』や『南総里見八犬伝』の漢語の語彙や用字についてのご論考が見受けられるのも、文学畑の人間からは注目される。

先生が文学部長の要職につかれたのは、平成二年九月から平成六年の八月で、二期勤められたことになる。そのうちも我が校の評議員を勤められ、平成十五年四月から平成十九年の三月までは、本学の大学院文学研究科長も勤められた。ちょうど様々な大学院の改革が行なわれようとしているときで、二期つとめられた期間中に、学内選考などの入試方法に新たな道を開かれたのは記憶に新しい。

先生はいつも瀟洒な着こなしをされていて、優しい物腰でお話をされる。温顔をたたえられ、たえず回りの者に気

3 鈴木丹士郎教授を送る辞

を使いながら冗談をおっしゃる反面、大学側や行政側の不合理で非礼な申し出や要求には、容赦無く鋭い叱正を發し、気色ばむようなご様子さえ見せられた。先生のそういった厳しさは、何よりも学問領域を主体として大学を考えべきだという一義より出て、なおかつそこに己れをも強く律しようとする一つ倫理観が働いているように見られた。くり返すが、こういうときに、鈴木丹士郎先生のような真の意味の重鎮と呼べる先生を失うのは、大学にとって大いなる損失である。